

〔報 告〕

精神障害者の就労に関する家族の想いと支援のあり方

中戸川早苗

要 旨

地域における精神障害者の就労環境は厳しく、挫折体験を持つ当事者は多い。困難に直面した当事者を家族は支えるが、精神障害者の就労に関する家族の想いを調査した研究は少ない。そこで、本研究の目的は、精神障害者を抱える家族の抱く「精神障害者が就労すること」への想いとその変化の過程を明らかにし、家族が抱く「就労」への想いをふまえた看護援助への示唆を得ることである。

家族会での参加観察およびインタビューを行い、精神障害者の家族が抱く「就労」への想いについて収集したデータを質的に分析したところ、9カテゴリが抽出された。さらに、その想いを受け止めていく過程は後述の《 》に示した4つの局面に分類された。

研究参加者は、《親としての期待》の中で【愛情と苛立ちのアンビバレンス】から、働くことに向き合えない子どもに腹立たしさ・焦りを感じていた。しかし子どもにも働きたいという想いがあり【子どもなりの活動と挫折の繰り返し】を体験していたことを知り、《親の力だけではどうにもならない無力感》を感じ、《できれば働かせてあげたいという親心》を抱きながら、《親として就労より生活維持を優先してほしい》という想いによって変わった。また、これらの局面は一直線を描くように次の段階に進むのではなく行きつ戻りつしていた。このような就労への期待とそれを阻む問題・諦めざるをえない葛藤状況への想いを十分に受け止めた情緒的な支援の必要性が示唆された。

キーワード：精神障害者の就労， 家族の想い， 看護支援

1. 緒 言

現在、地域における精神障害者を取り巻く就労支援は、「障害者の雇用の促進等に関する法律」や「障害者自立支援法」の改正に伴い変遷の時期にある。一方、入院環境においては、厚生労働省の2011年の患者調査によると精神科病院に入院している患者は約307,000人おり、その内受け入れ条件が整えば退院可能な患者は約70,000人とされている。国は2004年から10年間でいわゆる社会的入院とされる70,000人の退院、社会復帰を図ることを目標として掲げているが、対応に困窮している現状がある。

職業をもつということは、社会の中で生きる一つ

の方法を獲得することであるといえ、社会復帰においては、就労支援が必要であることは理解されている。

精神障害者の就労の意義について、田村（1993）は、「生活の維持という経済的側面のみならず『自分が役に立つ価値ある存在だという』実感に裏づけられた、『社会人として周囲から認められている』という、self-esteemとidentityのレベルの問題として受け止めることが大切」と指摘している。社会復帰への実現に向けて「就労」のもたらす意義が大きいことが窺える。

精神障害者を対象に「働く動機を支える想い」に焦点を当てた中戸川、出口（2009）の研究では、「家族の支え」が精神障害者の働く動機を支える一つの要素となっていることが報告され、精神障害者

が継続的に就労に就くためには家族の心理的な支援が必要であることが窺える。また、近藤、荻、大西(2008)の研究では、精神障害者の就労に取り組む姿勢は、「家族の思い」によって左右されることが報告されている。

しかし、これまでの精神障害者の就労に関する研究では家族を対象とした研究は限られており、家族の立場にたち、家族がどのような思いで精神障害者の就労を支えているのか、あるいは就労への希望を断念し、その喪失にどう向き合ってきたかということについて記述したものはほとんど見当たらない。

精神障害者の家族のおかれている状況や家族の心的体験は、さまざまな研究報告、手記などにより明らかにされているが、就労に関する家族の体験は見当たらない。これまでの家族の研究の多くは、家族の病理に注目する病因論的な研究と、それらを基礎とし家族を治療の対象とする傾向が強かった。この歴史的な背景を受け鈴木(2000)は、「家族のさまざまな行動は精神病患者の出現した家族の問題として説明される傾向が強く、当の家族の気持ちや経験が充分配慮されてきたとはいいがたい」と述べ、家族がもつ「希望」をふまえた看護援助に関する研究に取り組みその必要性を明らかにした。この家族の抱く希望の中には就労に対する希望も挙げられていた。しかし、就労に焦点を当てた研究ではないため、深く追求はされていなかった。

精神障害者を抱える家族の抱く「精神障害者が就労すること」への思いの内容とその変化の過程を明らかにし、家族が抱く「精神障害者が就労すること」への思いを理解することは、家族をケアするうえで、また精神障害者の社会参加を促進させる環境を作るうえでも重要になってくると考える。

看護師が就労に焦点を当て、精神障害者を抱える家族の苦悩・経験を見つめたうえで、看護師に求められる基本的な姿勢を追究していくことは、地域における看護師の社会生活支援あるいは病院における退院支援の充実に寄与していけるものと考えられる。

II. 研究目的

本研究では、精神障害者を抱える家族の抱く「精神障害者が就労すること」への思いとその変化の過程を明らかにし、家族が抱く「就労」への思いをふまえた看護援助への示唆を得ることを目的とする。

なお、本研究においては、各家族成員の個人的体験としての「精神障害を抱える家族成員の就労」への思いを明らかにするため、家族を集団としてではなく各家族成員として捉えることにする。

III. 研究方法

1. データ収集場所の概要

都市部にあるA市内の家族会で、会員数は56名、賛助会員は365名である。主な活動は、①総会(年度初め)、②例会(月一回)、③役員会(月一回)・おしゃべり会(月一回)④県・市家族会連合会などへの参加、⑤請願・陳情・要望活動などである。「おしゃべり会」では、会員の方々が、家族会で販売している自主製品を作りながら、自由におしゃべりを楽しんだり悩み事を相談したりしていた。自主製品に関しては、地域のイベントに参加して、その売り上げを、親亡き後の子どものために使いたいと、家族会の口座に貯金をしていた。

おしゃべり会や例会の参加者は、毎回20名ほどであった。会員の平均年齢は60代半ばであり9割が親の立場、その他にきょうだいや伴侶の立場などであった。家族の疾患は、主に統合失調症で、その他にうつ病や神経症であった。

2. 研究参加者の選定方法

家族会の定例会議を経て会長の承認を得た後、家族会活動に参加しその際、会員に向けて研究の説明と自己紹介を口頭で行った。研究の主旨に同意し研究参加への承諾が得られ、「同意書」に署名を頂いた人を研究参加者とした。親の立場7名、きょうだいの立場3名の人から「同意書」を得られたが、本論文では親の立場である研究参加者7名を分析の対

象とした。

3. データ収集方法

データ収集期間は、2009年12月～2010年6月で、参加観察法およびインタビューによりデータ収集をした。家族会活動に参加（全20回・1回4～8時間）し研究参加者と行動を共にしながら、家族会の活動の様子やメンバー同士の関係などを観察した。精神障害を持つ家族の就労に関する体験や想いを聞いていく際、研究参加者と行動を共にすることで、本音の語りが聴けるのではないかと考えた。その意味で単なる観察者であるよりは参加者であることを選択した。

その際、佐藤（2010）が述べる4段階の観察者の役割のうち「ある程度観察もするが参加が主」という立場でデータ収集を行った。また同時に、研究参加者とのコミュニケーションを図り信頼関係を形成しながら、緊張のない状態をつくるように配慮した。

インタビューは非構成的方法で各々の研究参加者につき30分～1時間30分程度複数回実施した。インタビュー内容は、研究参加者の家庭、職場、対人関係などの社会生活場面やその状況、「精神障害をもつ子どもの就労」についてどのような想いを抱いてきたか、それはどのように変化したのかその経過についてデータ収集を行った。

同時に研究参加者の表情・態度などの非言語的反応を含め、フィールドノーツに記述し逐語録を作成した。

4. 分析方法

1) 研究参加者個人のフィールドノーツに蓄積されたデータとインタビュー内容をもとに、個別分析にて逐語録から精神障害を持つ人を抱える家族の抱く「精神障害者が就労すること」への想い、を意味のまとまりごとにラベルに転記し、家族の言葉をなるべく用いて簡単な表現にまとめ、これを1次コードとした。意味内容が類似する1次コードを集め2次コードとした。さらに2次コードの類似した内容を3次コードとして集約し、これをサブカテゴリー

とした。サブカテゴリーの類似点と相違点を、研究参加者の語り（セグメント化したデータ）を読み返しながら比較し、サブカテゴリーを整理してカテゴリーを抽出していった。コーディングの過程では、インタビュー記録に含まれている言葉や文章の意味は、インタビューが行われた時点でその研究参加者が語った内容の全体だけでなく、研究参加者が他の時点で語った内容とつぎ合わせを行い広い文脈に照らして理解していった。

コード化によってデータの縮約が行われる一方でオリジナルの文脈への参照を何度となく繰り返し、それを参照しながら行為や語りの意味を明らかにしていった。

全研究参加者に対して上記と同じ作業を繰り返し、各研究参加者の精神障害を持つ人を抱える家族の抱く「精神障害者が就労すること」への想いに関するカテゴリー、サブカテゴリーを抽出した。さらに、個々人の想いを抽出したカテゴリー間の関連を時間軸に沿って比較しながら図に示し変化の過程を分析した。

2) 個別分析でコード化され導き出された全研究参加者のカテゴリー、サブカテゴリー、セグメントの類似性に着目して、すべての事例に共通する精神障害を持つ人を抱える家族の抱く「精神障害者が就労すること」への想いを抽出し、全カテゴリー間の関連を時間軸に沿って比較しながら図に示し変化の過程を分析した。

5. データの真実性の確保

データに含まれる意味内容を、その豊かさをできるだけ損なわないように、重層的な文脈を考慮に入れながら意味を読み取っていった。また、分析過程を通して、データの読み取りや分析の偏りを防ぐため、これら一連の過程を通して定期的に精神看護学領域で質的研究方法に精通している研究者に、専門知識の提供を受けながら分析を行った。

また、研究参加者から語られた内容に関して、カテゴリーの抽出まで分析を進めた段階で意味の解釈に間違いがないか、研究参加者ごとに作成したカテ

ゴリー, サブカテゴリー, 語りの内容を記載した表を研究参加者全員に確認して頂いた。

6. 倫理的配慮

研究参加者には研究の趣旨と方法を説明し, 本研究への参加は自由意思であること, 語りたくない内容は無理に語らなくてもよいこと, 得られたデータは研究以外での使用はせず, 匿名性が保たれること, 公表時には許可を得ることなどを説明した。収集したデータを研究参加者に開示し, 研究に使用不可能なデータの確認を研究参加者全員に行った。また, その際, データの訂正や補足を受けた。本研究は, 愛知県立大学研究倫理審査委員会の審査を受け承認を得た。

なおインタビューの際には再度, 研究の目的と研究参加者の権利について説明し, 研究参加およびインタビューの録音に関して同意を得た。インタ

ビューの場所と時間はプライバシーと心地よさが保証されるように, 参加者の希望を尊重した。

IV. 結果

1. 研究参加者の概要

研究参加者7名は, 統合失調症を患った子どもの親で, 父親1名, 母親6名であり, 年齢は60歳代~70歳代であった。複数の子どもが統合失調症を患っている研究参加者もあり, 子どもの性別は, 男性7名, 女性2名で, 平均年齢は40.1歳。罹病期間は発症後すぐに初診とならない場合が多く推定であるが平均して約20年間であった。現在, 医療, 福祉との繋がりを全員持っており, 彼らの子どもは全員, 現在までの間に一般就労やアルバイト, 保護的就労などの就労体験があった。就労期間に関して

表1. 研究参加者の概要

	年齢・性別	同居家族	子どもの性別年齢	子どもの疾患	子どもの発症時期	子どもの就労経験	現在の就労状況・社会復帰施設利用状況
A氏	60代後半男性	妻と息子の3人暮らし	息子・30代半ば	統合失調症	大学生の頃	アルバイトを半年間継続したことがある	地域活動支援センターを時々利用
B氏	60代後半女性	夫と息子の3人暮らし	息子・40代前半	統合失調症	30代前半	高校卒業後から30代前半まで同じ会社に勤務	地域活動支援センター, 病院の作業療法を時々利用・家事を部分的に担当
C氏	70代前半女性	夫と二人暮らし 息子は別世帯	息子・40代前半	統合失調症	大学生の頃	30代前半まで就労経験なし	小規模の工場(職親)で半日勤務を10年以上継続中
D氏	60代後半女性	夫と次男の3人暮らし	長男・40代半ば 次男・40代前半	統合失調症	長男は中学生, 次男は大学生の頃	長男はなし次男はアルバイト時正規社員への声がかかったが断念。この時の就労期間は1年半。その後2~3ヶ月の就労を数回繰り返した	長男は入院中次男は就労継続支援事業B型施設を利用
E氏	70代前半女性	息子と2人暮らし(夫は他界)	息子・40代半ば	統合失調症	20代前半	高校卒業後から20代前半まで公務員。発病後は1~3ヶ月の就労経験がある	現在は未就労
F氏	60代後半女性	夫と2人の娘との4人暮らし	次女・30代半ば 長男・30代前半	統合失調症	次女は20代半ば, 長男は10代後半	次女は2~3ヶ月のアルバイトを4~5回長男は2年以上のアルバイト経験があるがその後は2~3ヶ月の就労を数回	次女は就労継続支援事業B型施設を利用長男は入院中
G氏	60代半ば女性	夫と二人暮らし 娘は結婚し別世帯	娘・40代前半	統合失調症	10代後半	アルバイトを半年間継続したことがある。その他にボランティアの経験がある	主婦をしながらボランティア活動をしている

表2. 精神障害者の家族が抱く就労への想い (局面I: 親としての期待)

カテゴリー	サブカテゴリー	主な聴き取りの内容
愛情と 苛立ちの アンバランス		息子が家族想いの優しい子だったので、僕は息子と話して大学は福祉科に行かせました。彼は、福祉科で学んだことを活かして生きていくのだろうと、私は思っていた。親の想いはそうだった (A氏)
	一人前になってほしいという親心	夫は、息子が19歳で発症した時に車の中で泣いていました。上の二人が女の子で、3人目は男の子、なんて思って生まれてきた子だったので、期待もしていたのでしょうね (F氏)
		息子は病気を患い今までの仕事を辞めた後、測量の仕事の助手みたいな、何か運んだり、もっとこっち引っ張れ、とかいろいろ言われるような、そういうことをやっていました。自分のこれからの事を考えているかもしれないと、その時は本当に期待していたんですよ。こういうところで仕込まれると、ちょっとはものになるのかなあ、なんて、ほんとは内心期待もしていたんです。でも、そこもひと月で辞めてしまいました。辞めさせられるのか、辞めてくるのか、それで帰ってくるんです (E氏)
	何をやっているのかという腹立たしさ	夫は大卒で銀行勤務をしており、私の実家も医業を営んでいたので息子が病気になる前は、息子もホワイトカラーの仕事に就くものだというイメージがあったのです。病気とは思わずに、何をやっているんだろお、って、その頃は、腹立たしく思ってたんです (C氏)
	息子は7年間家にいるわけですよ。親は、何しているんだろ、ってもんもんとするわけですよ。医者にもかからないと言っているし、病院に行かないということは、お薬も飲んでない、仕事も行かない (B氏)	
	やっぱり、卒業の時期になると、これからは働いて自分の生活は自分でしなくてはいと思うじゃんか、親というもの、男の子には特に、そう思うものだよ、それで僕はめっちゃくちゃなことをやったと思うんだ。働かざるもの食うべからず、なんて思ってね、それでも1年や2年は我慢して、やりたいことをやらしたんだけど、でも、24歳か26歳くらいになったら、そろそろ考えなくてはいけなくていいですよ。そうやって、子どもを追い詰めたと思います。就労して生きていかなくたってはいけないという想いを突きつけた (A氏)	

() 内のアルファベットは研究参加者

は、発症前に一般企業で10年以上働いた経験のある人が1名、発症後に保護的就労を10年間継続している人が1名いるのみで、ほとんどの人が短い期間の就労であった (表1)。

2. 精神の障害を持つ子どもの就労に関する親の想い

7名の研究参加者からは、就労に関する想いと共に、子どもが精神疾患を患ったことに対する辛い体験や困難感が語られたが、その現実と向き合いながら就労を目指そうとする想いが多く語られた。

精神障害を抱えた子どもの就労に関する親としての想いを分析したところ、子どもにどうにか働いてほしいという就労への期待とそれを阻む問題・諦めざるをえない状況についての葛藤などの想いが、9カテゴリー、29サブカテゴリー抽出された。さらに、その想いを受け止めていく過程は、《親としての期待》(表2)、《親の力だけではどうにもならない無力感》(表3)、《できれば働かせてあげたいという親心》(表4)、《親として就労より生活維持を優先してほしい》(表5)の4つの局面に分類された。

これら親の想いをA氏、B氏、C氏の3名の事例を基に具体的に紹介していく。

文中の《》は局面、【】はカテゴリー、『』はサブカテゴリー、「」は研究参加者からの聴き取りの内容を示した。

1) A氏の事例：父親としての期待とその後の反省・苦しみ

①親としての期待

A氏は、大学卒業後定年まで大企業で働いてきた人である。

A氏の息子は、子どものころから親が感心するほど優しい子だった。そのためA氏は福祉の道などが息子には合っているのではないかと思い、話し合い、A氏の息子は大学の福祉科を専攻した。A氏からは息子が自分を活かした職に就けるようにレールを引いてやりたいという親心が語られた。

しかし、息子は大学生の頃統合失調症を発症していたため、卒業後就職しなかった。このA氏の想いに反した息子の行動に対して、A氏は自分の取っ

表3. 精神障害者の家族が抱く就労への想い（局面Ⅱ：親の力だけではどうにもならない無力感）

カテゴリー	サブカテゴリー	主な聴き取りの内容
子どもなりの活動と挫折の繰り返し	子どもにも就労への焦りがあった	A県から帰ってきて入院したりして、入院して退院してからちょっと引きこもりの時期があって、その頃かなあ、息子は、「もう働かなきゃ」って言って、すごく焦りを感じてみたい（C氏） もう、ほんとに、仕事、仕事ってね、バイトなんだけどね、なんか、仕事したい、って言って、焦りみたいなのが出てきて、娘も息子も、自分が不安定になれば、なるほど自分もちゃんと働きたい、働いて、ちゃんと収入を得たいって思う、普通に皆と同じように、っていうのが、よけい強くなるのかな（F氏）
	子どもの辛さに寄り添えなかった	病院に入院して、ぶらぶらしている人を見て、自分は働かなくてはいけない、と強く思ったみたい。働きたい、という想いが入院して強くなった（D氏） 職場へ行くと、まだそんなに、本人自身も自分の病気がどんなものなのかを分からないこともあって、言われたらやらなくてはいけない、分かっているかと聞かれたら、あんまり分からなくても、はい、と言わなくてはいけないと思って、はい、と言うでしょ、そうすると、職場の人は理解してくれたと思うでしょ。でも分かっているから、同じことして、また、怒られる。そういう叱責、叱責の中に、3ヶ月、6ヶ月いるということは大変だよ、今になってそう思う（A氏） 息子は働けないという状況を受け入れ、自分は、こういうことしかできない、このくらいできればよしととするか、っていうふうに、自分で納得した時期があると思うんですけど、親には言いませんけど（C氏）
	病気の理解が遅れたことへの罪悪感	今の状況を保ちながら、彼らしく生きていってもらえれば良いな、というように思えるように変わったのは、病気の理解ができたからです。それは、子どもの病気と障害を、丸ごと受け入れることができたということと、それから今まで、それができなかった親としての自責、何でもっと早く分かってあげなかったんだろうか、という、親としての自責があるから今、罪の償いの気持ちでいる（A氏、B氏、D氏）
病気の理解に伴う苦痛	子どもの生きる力の引き出し方が見えなくなる	子どもが本当はやろうと思えばできることまで、親が不憫に思って全部やっちゃうんだ。家族が病気を理解したら、もう一つクリアしなければならない問題がある。いくら病気や障害があっても、その子は自分で生きる力がゼロではない。その力を、どうやって引き出すかを家族は見えなくなっちゃうわけだ。不憫に思って、かわいそうだと思って、親がやらなければいけないという思いが強くて（A氏、G氏）
	障害による生きにくさと苦労を抱えた不憫さ	息子は、ホワイトカラーにつくもの、という家の中の雰囲気にはプレッシャーを感じていたのではないかと思います。皆に期待されて（C氏） 娘は、友達からの携帯を切ってしまったりするんです。私は、彼氏もいない、仕事もしていない、太っているから人と会いたくない、いやだ、って言ってね、自分から関係を切っていくんです、でもメールをするお友達は欲しいみたいなんです。あの子は、いろんな出会いの中で、柔軟に考えられないものだからぶつかることが多くて、病気の顔になる（F氏）
	抱え込むことが子どもの自立の妨げになる	簿記の講座なんかも受けには行きましたけど、やっぱり、途中で挫折しましたね、区の図書館で勉強をやっていたのね（C氏） 娘は、特に人間関係が難しいと医師から言われています。何か問題を抱えると寝れなくなるけど、仕事に行かなきゃいけないでしょ。職場で任されたことは全部やらなくっちゃ、って思うと、どんでんできなくなるのよね、体も辛いし、そういうことがよくありました（F氏） 20代、30代の当事者っていうのは、恋愛もしたい、できたら結婚もしたい、もちろん働いて収入も得たい、いくら病気や障害があったって、そういう想いがあると思う。親はそんなこと無理だと言ってしまおうが、僕らだって若いときは同じだった。20代、30代は、50、60の人生経験積んだ親の物差しではかられたら、もたん（A氏） 独立して生活したいと言った時もあったの。だけど「とんでもないわよ、あなたの将来のためにお金を今貯めない」と言いました。家族と一緒に住んだら経済的に楽だから、というように伝えて、押さえつけて依存をさせてしまったと思います。本人がやりたい時が自立の時なのに、その時に私が経済的に余裕がないよ、と言ってしまい拒否したことで、自立の機会を失ってしまったと思うの。それはすごい反省しているの（D氏）
薬物療法への複雑な想い	真面目なんです。体力もあるんです。でも、しゃべることとか、挨拶とかは上手くできません。人に話しかけられれば結構しゃべるんですけど、自分から口をきくことはないです。副作用が酷いので薬を飲んでいないのです。飲まないことが良いのか悪いのか、将来的には分からないんですけど、薬を飲むともっと安定して、働けるようになるのかしら（B氏）	

表3. 続き

カテゴリー	サブカテゴリー	主な聴き取りの内容
就労の可能性への見極め	慢性的に安定しない調子の観察	家でも調子を悪くすると病気の顔になります。例えば、あの子、今、禁煙していてダイエットもしているの。だから、イライラが溜まってくるとタバコが欲しくなるのよ。この間も夜中に「タバコが欲しい、我慢できない」と言って、お父さんに、ちょうだい、って言ったけど駄目だと言われたの。そしたら、私に「お金ちょうだい、買いに行ってくる」と言ってね、そういう時の顔は、きりっとした病気の顔 (F氏)
	期待したい想いを抑える	息子が病気になって、お医者さんの話とか、家族会の話とかを聞いていく中で、働けるようになるのは、夢、理想だと思いました。それで、働くようになりなさいとか、働きなさいとか、親の希望は一切息子には言わないようにして押さえていました (C氏)
	無理しない生き方への願い	統合失調症の場合は無理な働き方は調子を崩す、そういうことを理解して、本人も社会制度を上手に活用することが、安定した地域生活に繋がる。障害年金プラス就労でもいいのではないだろうか (A氏)
社会で支える仕組みへの切望	子どもの苦労と努力に添えない無力感	職場で、娘は言われたことが理解できない、他の人は理解できているのに私だけが理解できない、自分より若いアルバイトの学生さんが分かって自分は分からない、と言うんです。子どもが苦しむのは見たくないです。作業所でも人間関係のトラブルを抱えるんです。日常の些細なことでもね、思い詰めたりするんですよ。もう、いいよ、って思うんです (F氏)
	精神障害者の特性を知ってほしい	一日働いたって、2時間だと思えます。あのベテルの家だって、自主申告でやっているけど就労時間は2時間だよ。人の4倍疲れるわけ、気も違うし。普通8時間労働というなら、この人たちにとっては、2時間で8時間なんだと思えます (A氏)
	少しずつ次のステップに進める支援がほしい	今の状況に合わせてその人なりの生き方があると思う。どの人も支援施設を利用しながら、自分なりのステップが見つけられるということが大事だと思います。そうすると、就労への道も開けてくる (A氏、G氏)
	知的障害の方々は、養護学校に行って一般就労講習を受けています。いろんな事をやってもらっています。精神障害者は、全然ないから、何にもないんだ、良くて作業所に行くくらいだ (A氏)	
	制度を変えて子どもの望みを叶えたい	就労なんて思っている人は、ほとんど家族会の中ではない。だけど、就労もさせてあげたいし、本人もしたいと思っている家族もいて、その方の望みを叶えるためには、どれだけ社会の偏見を払拭しなければならないか、どれだけ制度を変えていかなければならないか (G氏)
家族の支援がおきざり	選ぶほど職はないのよ。この病気の理解が企業や職場にないでしょ。精神障害を持つと長時間働けない、週何日も働けないということがあるから、そのことを上手く汲み取ってくれて、グループ就労とか、職場と一緒にいくことができるジョブコーチなどの充実もやらなければいけないし、そういう働き方を今、考えなくてはいけない (G氏)	
		7年間は本当に辛かったです。その気持ちが変わっていったのは、ボランティアをしていた時たまたま家族会の方と知り合って、保健所を紹介され医療に繋がったからかしら。保健所の方と病院の先生、看護師さんが家にきて息子を見て下さった時には、本当に先生を拝みました。そのくらい、救われた、という気持ちが強かったです (B氏)
		障害をもつ子を家族が抱えているんだよね。もしその子が作業所に行ったら、自治体から作業所に一人につき多額のお金がおおりる。でも家族が見ている場合には何にもない。作業所に行ける人は、精神障害者の場合は軽度の人で、その軽度の人のところには自治体が金を出すわけでしょ。家族が見ている人には、何にもないよ。家族が、生活の面も、経済的な面も、しょっている。これが、悲劇なんだ (A氏)

() 内のアルファベットは研究参加者

た態度を後悔しながら次のように語った。

「やっぱり、卒業の時期になると、これからは働いて自分の生活は自分でしなくてはいけないと思うじゃんか、親というものは、男の子には特に、そう思うものだよ。それで僕はめちゃくちゃなこ

とやったと思うんだ。働かざるもの食うべからず、なんて思ってね。それでも、1年や2年は我慢して、やりたいことをやらしたんだけど、でも、24歳か26歳くらいになったら、そろそろ考えなくてはいけないでしょ。そうやって、子どもを追い詰めたと思います。就労して生きていかな

表4. 精神障害者の家族が抱く就労への想い（局面Ⅲ：できれば働かせてあげたいという親心）

カテゴリー	サブカテゴリー	主な聴き取りの内容
働きたいという望みを支えたい	理解ある環境で働かせてあげたい	息子は今、調子が悪かったら休ませて頂いたり、勤務も半日でいいと言ってもらえます。理解がありますよね。上手く巡り合えました。このようなところは数少ないと思うんですよ。ありがたいです（C氏） 今は車に乗ってあるんです。すごく面白いことも言ってくれるし、だからすごく落ちついているということはわかるんです。でもだからといって、まともな仕事にはもちろん就けないだろうけども、理解して下さる人がいれば、やれるかなと思うんです。仕事に関しては、引っ張って行ってくれるような人に巡り合えればいいな、と思います（E氏）
	就労としての家事	収入に繋がらないかもしれないけど、主婦業だって仕事だよ。バイトはやってたけど、主婦業が仕事でかまわないと思っているの（G氏） 息子には、家の仕事手伝ってもらっています、部屋、風呂、トイレの掃除、時には買い物も行ってもらっています。ご飯食べるには働かなくてはいけないからね（B氏）
	働きたいという気持ちを大切にしたい	人生なんて失敗もいろいろあるじゃないですか、失敗をして体験していくわけでしょ。親は子どもにも失敗させたくないものだから、そうやってくるけど、親の目線から見ても無理だと思われる就労でも、本人が体験してみたい、働けるものなら働いてみたい、という気持ちを大切に扱わなければいけない（A氏） 穏やかにはなったけど、どういう風にしたら就労に繋がるのかな、といつも思っているんですよ。やっぱり、外に出ないことには駄目だわ、って思っているんですよ（E氏）
	息子にとって働くことは誇り	親がわが子を不憫に思って就労は難しいとか、そういうふうに関心を持って諦める、これも一つの悲劇で、やっぱり本人の気持ちが最優先だからね（A氏） 近所の人が息子に、「おい、何処にっているんだ、元気か」とか聞くわけよね、だけど息子は受け答えできなかった。でも作業所と結ばれてからは、「僕、作業所で働いています」って言えるようになってね、いつもそう言っていたらいいの。働いている、ということをお願いしたいよね、本人が言いたい、私はどっちでもいいの、と思うんだけどね。いつも、何か、働いてほしいという意識はあるんだね（D氏）
	自己価値観を高めてあげたい	働くことは自信に繋がる 仕事をもちと自信が持てるようになって自分に安心できるんじゃないかなあ、と思うんです。だから働けるものなら働かせてやりたいとは思っています。今は無理ですけど（E氏） 働くことって、自信に繋がるよね息子には、仕事もさせてあげたい、自信が持てるようになるものね、それと、結婚とかもさせてあげたい、趣味も持ってほしいです（C氏）
	働くことはお金じゃない	働くこととお金じゃない 結婚については色々あってね、昔付き合っていた人が妊娠してしまったの。そしたら、その女の子が誰にも相談せずに子どもをおろしたの。それで、息子をひどく叱ってね、一人の命を奪ったのよ、って。息子も自分はとんでもないことをしてしまったと感じたみたいで、それから結婚のことはあまり言わなくなったかなあ。20代のころの話なの。働けないことから結婚を断念したの（D氏） 働く、という喜び。そして、200円でも、300円でも収入があると。この喜びというのは、これはね、人間の尊厳にかかわる問題だもん（A氏） 精神の病気というのは、お医者さんに通って、それで治るわけじゃない、やっぱり、生きがいか、生活のしがいか、そういうものが感じられた時に、回復の道に繋がっていくんでね、だから僕らの夢は、そうなんだ（A氏）

()内のアルファベットは研究参加者

くてはいけないという想いを突き付けた。」

この時期、A氏は病気のことがよくわからずに、『何をやっているのかという腹立たしさ』を抱いた。しかし、そこには『一人前になって欲しいという親心』も存在し、【愛情と苛立ちのアンビバレンス】な想いの中で《親としての期待》から息子を追い詰めた現実が語られた。

②親の力だけではどうにもならない無力感

《親としての期待》は、【愛情と苛立ちのアンビバレンス】な想いの中で、息子の働けない状態やそのことによる辛い気持ちに寄り添えない状況をもたらしていた。しかし、A氏は『子どもにも就労への焦りがあった』ことを思うと、【子どもなりの活動と挫折の繰り返し】をしていたのだと後になって感じたと辛そうに語った。

表5. 精神障害者の家族が抱く就労への想い(局面Ⅳ:親として就労より生活維持を優先してほしい)

カテゴリー	サブカテゴリー	主な聴き取りの内容
		今は、障害者施設の卓球教室や家族会の料理教室、それと絵が好きなので病院の作業療法で絵を描いたり音楽療法にも参加したりしています。少しずつ集団の生活に慣れていくことで、社会にでる、働けるようになる、ということに繋がっていくものね。場数を踏むことが必要よね。今は仕事をしなくてもいいと思っています(B氏)
	今の子どもを見守りたい	医師との面接で、切断した足は生えてこないでしょ、と言われた時は受け止められませんでした。でも先生が蝸牛の話をして下さったのです。蝸牛に角出せ頭出せと言ってみても、すぐにはだめだけど、目を離したら出ていた、ということがありますよね、ずっと向き合っているより、ご自分の時間をつくられてはどうですか、と言われ気が休まりました。回復への期待にも繋がったかな。子どもを見守ることができるようになりました(C氏)
		子どもから学ぶことが沢山ありました。世界を広げてくれました。子どもが障害を患ったことで、私は、自分と向き合う機会を与えてもらったと思っています。そういうことを感じられるようになると、働かなくなった息子を受け止めることもできます(B氏)
就労への 思惟の やわらぎ	生活の中のできることを確認してあげたい	僕の今の目標というのは、息子が30代の間に一人暮らしを体験させることです。それが一番大事です。就労もちろん大事だけれども、福祉就労でもできればいいかなあ。まず、一人暮らしをしてみても、それで自分が一人で生活する場合に、何ができて、何ができないのかを体験してもらいたい(A氏)
		息子と一緒に、家族会の料理教室に行ったり、出かけたり、たまには親戚の食事会に行ったりしてきて、できることが増えていく息子を感じられると、良かった、と思います(B氏)
		トイレの掃除なんて私、最近ずっとしていないんですよ。家の仕事を息子が手伝ってくれて助かっています。息子にも、「良くやってくれているね」って言うてるの。でも、トイレの掃除なんて、ちょっとこする程度でね、そんなに綺麗にやってくれるわけではなくても、「良くやってくれているね」って言うようにしているんです。本当に助かっていますから(B氏)
	無理な働き方より健康を大切にしてほしい	息子は、疲れると胃か腸にきて、体が先に悪くなるんです。だから、体の様子を観ていると調子が良いかどうか分かるのよ。このことが分かってからは、病気の手前で、やめよう、って言えるようになったの。そしたら、それから息子は、まず、自分が今しなくてはいけないことは健康で生活すること、って言うてくれたのよ(D氏)
		子どもが社会の中で、「頑張ってみようかな」って働こうとしてくるところで、あのお、挑戦してみようかなあ、って、挑戦して、やっぱり、大変な想いをしているのを見ると、もう、いいよ、って…何か、この子らしい生き方ができれば、そう、働くことだけではなくて、健康を大切にしてほしい(F氏)
子どもの いいところ を大切に したい	人並みの幸せを掴んでほしい	息子は、冗談を言ったり、笑わせてくれたりするんです。この子がいて良かったと思います。息子が働けるようになって、誰かと結婚できて、その方と2人で生活できるようになったらいいのになあ、って思ったりしてね、そういう生活をさせてやりたい(E氏)
	日常生活の調整を上手にこなしてほしい	就労は、なんか、ほど遠いことで、せめて、人なみに幸せ掴めたらとか、できることをしてほしい、というくらい、ささやかな希望にかわっていきんだよね、親は(C氏、G氏)
		家では、B氏家作業所と言っているの。働いてもらった分、今まではおこづかいとして月7,000円渡していたんだけど、今は、封筒に「給料」と書いて渡しているの。そのうちの1,000円は毎月貯金するように伝え、夫と一緒に銀行について行って機械で貯金しています。でも今は一人でできるようになりました(B氏)

()内のアルファベットは研究参加者

「結局はね、僕が息子を追い詰めたんだよ。だから、彼もアルバイトをやったりして、挑戦してね、それで倒れて再発もしたんだろうな」

A氏の息子は、調子の悪さを感じクリニックを受診していた。しかし、A氏は受診の話聞いても、何を甘えたことしているのか、と取り合わなかった。A氏からは、息子の苦勞と努力を受け止めるこ

とができず、『子どもの辛さに寄り添えなかった』ことに関する後悔の気持ちも語られた。また、【病気の理解に伴う苦痛】についても同時に語られた。

A氏は、就労しない息子を追い詰めたことに対し、何でもっと早くわかってあげなかったのだろう、と『病気の理解が遅れたことへの罪悪感』など息子に対する申し訳なさから心を深く痛めていた。また、病気への理解に関してA氏は、病気を理解

することで新たな苦しみや課題に直面する、と以下のように語った。

「親が乗り越えなければならない問題とはね、病気を理解したらそれでいいか、というそれだけではなく、今度ね、そのことによって負を抱えるんだな。何が負かというね、わが子が病気と障害があるということを知って、これは子どもを不憫に思っちゃってね、だからわが子を抱えるんだ。結局それがその子の自立の妨げになる。」

A氏は、病気と障害があることを受け止めざるをえないと語った。また、親が子どもを不憫に思い、これ以上わが子に無理をさせたり、何かに挑戦して失敗したりするようなことをさせたら傷つく、という思いが強くなり子どもを抱え込もうとする現実が語られた。病気や障害があることで、子ども自身も持っている生きる力を見いだすことがさらに難しくなっていた。このような『子どもの生きる力の引きだし方が見えなくなる』状況に陥ると、子どもがどうしたいのか、子どもの望みを受け止める、ということ置き去りにしてしまう危険性がある。『抱え込むことが子どもの自立の妨げになる』のだが、子どもを不憫に思う気持ちが先行して、そのことに親はなかなか気づけない、【病気の理解に伴う苦痛】が示された。

③社会で支える仕組みをつくって欲しい

A氏は息子を不憫に感じ無理をさせたくないと思う一方で、働きたいと望むなら、その気持ちを酌んであげたいという思いも語った。

「親がわが子を不憫に思って、就労は難しいとかね、そういうふうな決めつけちゃって、あきらめる、これも一つの悲劇で、やっぱり、本人の気持ちが最優先だからね。」

【働きたいという望みを支えたい】というアンビバレンツな思いが示された。そして以下のように、

A氏の“息子の就労”に関する想いの変化が語られた。

「一週間に一回でも、二回でも、たとえ1時間でもいいから働く喜びをもたらしてあげたい。お金じゃないんだわ、働くという喜びを感じながら働いて、それで、200円でも、300円でも収入があるということ、これはね、人間の尊厳にかかわる問題だもん。」

“息子の就労”に関する考え方が以前と比べ現在は異なっていた。【自己価値観を高めてあげたい】と思い《できれば働かせてあげたいという親心》が示された。

A氏は現在、息子が図書館に行ったり、地域活動支援センターに出かけたりするのを見て『今の子どもを見守りたい』と思うようになり、『生活の中でできることを確認してやりたい』『無理な働き方より健康を大切にしてほしい』と思うようになり【就労への思惟のやわらぎ】も示されていた。このように、《親として就労より生活維持を優先してほしい》と考えるようになった一方で、前述したような《できれば働かせてあげたいという親心》もなくなっているわけではなく、心の中に葛藤を生じやすい状況にあった。A氏は、このような想いを抱えざるをえない背景には、社会の受け入れ態勢が十分でないことがあると訴え、『精神障害の特性を知ってほしい』、『社会から疎外されているような気分を味わい支援を受けているという実感がない』と語った。

新しいことに馴染むことが苦手な精神障害者には、ゆるやかな居場所を用意しながら『少しずつ次のステップに進める支援がほしい』、『制度を変えて子どもの望みを叶えたい』などの思いが示され、精神障害者の就労の【社会で支える仕組みへの切望】を強く抱きながら、家族会活動に取り組んでいた。反省から見いだしたこの姿勢が、A氏の支えの一つになっていた。

2) B氏の事例：社会との距離が大きくなっていく 息子に対する不安

①親としての期待

B氏の息子は、高校を卒業して10年以上勤務していた会社を突然退職し、その後7年間、病院にも行けず引きこもってしまった。仕事に関して息子は、「働きたいけど働けないんだ」と訴えていたとB氏は語った。【子どもなりの活動と挫折の繰り返し】を体験し息子も苦しみを抱えていたようだと言った。

B氏は、実家が農家で子どもの頃から家業を手伝い、働くことに関しては親から厳しくしつけられてきた。そのため、働くこともせず家にいる息子に、『何をやっているのかという腹立たしさ』を感じ、またその時の息子に対する言動を反省したりしていた。しかし社会との距離を縮めることができない息子に対して、再び働いて欲しい、何とか自分を取り戻して欲しいという想いで悶悶と悩み、苦しんだと言った。そこには、【愛情と苛立ちのアンビバレンス】が強く存在していた。

②親なりの支えと限界

B氏が、苦しい状況から抜け出すきっかけとなったのは、家族会と出会い、保健所の相談窓口から息子が医療に繋がることのできたことである。しかし、開始された治療が合わなかったため、『薬物療法への複雑な想い』を抱え、薬物療法は受けないという判断を、B氏は息子を含め家族皆で話し合って決めた。その判断への不安を抱えながら、B氏が夫とともに息子のリハビリに取り組んでいる様子が語られた。

「薬を飲んでいないことについては、毎日悩んでいます。本当にこの選択でいいのだろうか。でも、決めたことだから。その分、散歩に行ったり、家の仕事をしたり、ということを通して家族でリハビリを一緒にやっていかないとね。それで、息子のリハビリは夫と一緒にやっています。」

B氏は、生活の中に多くの工夫を取り込んでいた。それは、“ご飯を食べるためには働かなくてはいけない”という考えのもと、『就労としての家事』を念頭においたB家独自のリハビリプログラムであった。B氏から語られたリハビリの様子の一部を以下に紹介する。

「買い物では、いくらあったらお願いしたものが買えるのか、必要な額を息子に考えてもらったりもしているの」とB氏は説明し、また「うちでは、B家作業所と言っているの。息子に働いてもらった分、今まではお小遣いとして月7,000円渡していたけど、今は、封筒に「給料」と書いて渡しているの。そのうちの1,000円は毎月貯金するように伝え、夫と一緒に銀行について行って機械で貯金しています。でも今は息子一人でできるようになりました。」

B氏と夫のリハビリプログラムにより、息子の生活能力の向上が観られるなど『日常生活の調整を上手にこなしてほしい』という想いが徐々に叶えられているようであった。また、B氏は、息子が家の仕事を手伝ってくれていることに関して、助かっている、と表現していた。家族皆でお互いに支え合っていると実感できているようだ。トイレ掃除は息子の仕事であるが、丁寧に仕事をこなせるわけではない。しかし、B氏は息子の仕事について以下のように語った。

「トイレ掃除なんてね、ちょっとこする程度でね、そんなに綺麗にやっているわけではないのよ、でも、よくやってくれているね、って言うようにしているんです。本当に助かっていますから。」

B氏は笑顔で語っていた。リハビリに手ごたえを感じ、できることが増えた息子を感じることで、『生活の中のできることを確認してあげたい』という想いが満たされ、B氏の安心感に繋がっているよ

うだった。

以前のB氏は、息子に一般企業で働くことを求めていたが、以下の語りのようにB氏の想いは変化していた。

「人間は働かないといけない。外に行ってね、生きていくためには働かないといけないよね。でも、家の仕事っていうのもあるものね。これも仕事だよね」と語るようになった。息子のペースを大切にしながら、「仕事を持つと自信が持てるようになって、自分に安心できるんじゃないかなあ、と思うんです。だから、働けるものなら働かしてやりたいとは思いますが。今は無理ですけど。」

『働くことは自信に繋がる』ことであり、働くことを通して【自己価値観を高めてあげたい】という想いが示され、《できれば働かせてあげたいという親心》が見られた。B氏は、息子にとって就労は必要なものなので、息子のリハビリ段階に合わせて獲得し、自立の方向に向かっていくことを願っていた。そして今は、《親として就労より生活維持を優先してほしい》と考えるようになっていた。

3) C氏の事例：理解ある雇い主との出会いと就労

①親としての期待

C氏の息子は、学習熱心で大学の教員から大学院への進学を勧められたという。また、C氏の夫は現在70代後半だが、大学を卒業し大企業に勤務をしており、C氏の実家も医業を営んでいたことから、C氏は「息子もホワイトカラーの職に就くものだ、というイメージがあった」と言い『一人前になって欲しいという親心』が語られた。【愛情と苛立ちのアンビバレンス】から、息子を追い詰めるような発言もあったと振り返った。

②親の力だけではどうにもならない無力感

C氏は、息子が病気になってから、いろいろなところに出向き病気に対する知識を得た。その後、働けるようになるのは夢、理想であると認識するようになり、「働くことを強いたり就労に対する親の希

望を言ったりしないようにし、押さえていた」と語った。もう何よりも息子の病状が良くなることを願い『期待したい想いを抑える』ことをしていたという。それは、以下のようなC氏の息子への想いからであった。

「息子も、ホワイトカラーにつくもの、という家の中の雰囲気プレッシャーを感じていて、皆に期待されて、息子の方が働くことへの焦りを抱いていたので、無理をさせないようにという想いからなのです。」

このようにC氏は、『無理をしない生き方への願い』を語った。しかし、『期待したい想いを抑える』ことは【就労への可能性の見極め】に繋がり、親にとって簡単なことではなかった。働けないという状況を一番早く受け入れられたのは、「たぶん息子で次にC氏でそして最後に夫だった」という。息子も将来への夢を断念し、「自分は、こういうことしかできない、このくらいできれば良しとするか、っていうふうに、自分で納得した時期があると思うんですけど、親には、言いませんけど」とC氏は語った。【子どもなりの活動と挫折の繰り返し】を体験し、息子は、その苦痛を乗り越え、折り合いをつける生活をスタートさせていた。しかし、親の方は気持ちの整理ができずにいた現実が語られた。

③今の息子を応援しようという想い

C氏の息子は、障害を持っていても働くことを諦めず、町工場で毎日、半日ずつ働き10年が経過しようとしている。その「息子の頑張る姿を見て、次第に夫も息子の回復を喜ぶ気持ちがでてきたんです。夫も受け入れられるようになったのでしょね」とC氏は語り、『今の子どもを見守りたい』という想いは【就労への思惟のやわらぎ】に繋がり、穏やかな気持ちもたらされていた。

C氏は現在、息子の就労に関して、「仕事はしてほしいが、何より急性期に陥るようなことは避けたい、仕事は行ってくれたらそれはそれでいい」と感

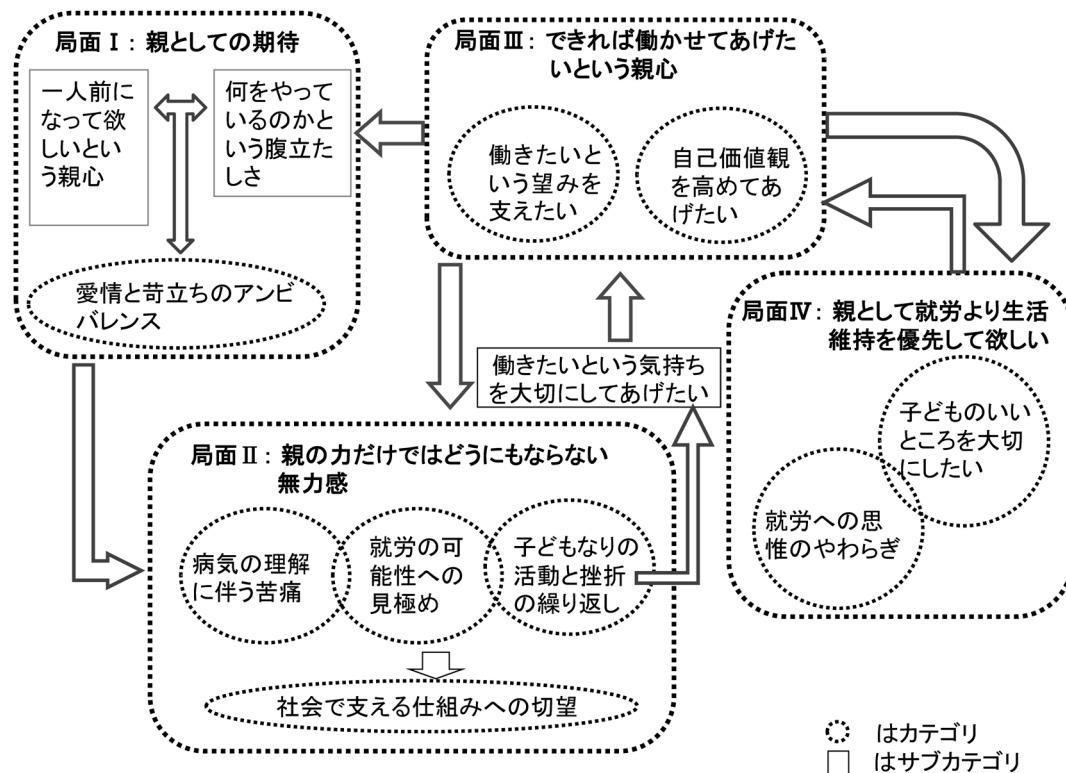


図1. 精神の障害を持つ子どもの就労に関する親の想いと変化の過程

じており、《できれば働かせてあげたいという親心》を抱きながら『無理な働き方より健康を大切にしてほしい』という想いでいた。《親として就労より生活維持を優先してほしい》という気持ちが強いようで、子どもの健康を第一に思う親心が表現された。『人並みの幸せを掴んでほしい』というささやかな希望に変わっていったと語った。

3. 研究参加者に共通する親の想いと変化の過程 (図1)

7名の研究参加者は皆、親として、子どもが自分の能力をうまく活かせるような生き方を獲得し、成長していくことを“期待”する思いから、『一人前になってほしいという親心』と、一人前からはかけ離れていくように見える子どもの行動に『何をやっているのかという腹立たしさ』が起こる【愛情と苛立ちのアンビバレンス】に苦しむ局面I《親としての期待》を最初に経験していた。

その後、この苦しみからの解放を求めて家族会に入会したり保健所に相談したりするなど、苦痛を家族だけで抱え込まないように相談支援を求める行動を起こしていた。家族会などで子どもの病気のこと

を学ぶと、就労に関して子どもの体験している辛さがわかり【子どもなりの活動と挫折の繰り返し】を知ると、自分の行動に対する罪悪感を抱えるようになっていた。この【病気の理解に伴う苦痛】により、苦しみから解放されない状況を体験していた。さらに自分の子どもの【就労の可能性への見極め】を行わなくてはならない苦痛も重なると、精神障害者への就労支援に関して【社会で支える仕組みへの切望】の気持ちを抱くようになっていた。このように局面IIでは《親の力ではどうにもならない無力感》を経験していた。

しかし局面II《親の力ではどうにもならない無力感》を感じ、苦痛が深まる方向に気持ちが傾くばかりでなく、子どもが働きたいという気持ちを持っているならば、その気持ちを大切に扱い、【働きたいという望みを支えたい】、【自己価値観を高めたい】という思いが起こる局面III《できれば働かせてあげたいという親心》へと親の想いは変化していった。ところが、働くことが困難な状況に直面し子どもが苦しむ姿を見ると、多くの人が再び局面II《親の力ではどうにもならない無力感》に戻った。

また局面Ⅲ《できれば働かせてあげたいという親心》が強くなると、局面Ⅰ《親としての期待》に戻ったりもした。このように親の想いは、局面ⅡとⅢを行きつ戻りつしたり、局面Ⅲから局面Ⅰに戻り局面Ⅱに移るなど循環していた。

やがて、【子どものいいところを大切にしたい】という気持ちや【就労への思惟のやわらぎ】を感じるようになると、まず《親として就労より生活維持を優先して欲しい》という局面Ⅳへと子どもに対する就労への親の想いは変化していった。しかしこの後も、局面間を行きつ戻りつしていた。

V. 考 察

研究参加者の語りからは、一人前になって欲しいという親心から、子どもに「働くこと」を求め「子どもを追い詰めていた」ということを振り返る語りが多く聞かれた。また、この背後には「期待を持っている」ゆえの「愛情と苛立ちのアンビバレンツ」な想いが聴かれた。家族がどのようなことをきっかけに、このような困難な状況を切り開いてきたのかに注目して看護支援について考える。

1. アンビバレンツな想いと向き合う

すべての研究参加者は、『一人前になって欲しいという親心』から、働くことに向き合えない子どもに『何をやっているのかという腹立たしさ』や焦りを抱き《親としての期待》を先行させて子どもを追い詰めてきたと振り返った。多くの親がこの【愛情と苛立ちのアンビバレンツ】に苦しんでいた。しかしその後、息子は働かないのではなく、この病気を患い働くことが困難な状況である中、働くことに挑戦して【子どもなりの活動と挫折の繰り返し】を体験し、苦勞していたことがわかると、子どもを責める気持ちが軽減していったように思われる。子どもと闘病の過程を共にするという新たな向き合い方を取り込もうとし、親も子どもの病気を学習し子どもへの理解を深めていくことで、困難な状況を切り開こうとしていたと思われる。しかし、このように新

たな関係を築いていこうとしているときには、家族自身のアイデンティティの動揺がある、と田上(1997)は述べている。そのため家族が自身で決めた新たな子どもとの関わり方に不安を抱くこともあるのではないだろうか。このアイデンティティの動揺から生じる不安に寄り添いながら、家族が子どもとの関わりに自信が持てるように援助していく必要があると思われる。

2. 理解とともに深まる親としての苦悩

この苦悩のプロセスの中で、家族が子どもへの理解を深めていくと、【病気の理解に伴う苦痛】が生じ『病気の理解が遅れたことへの罪悪感』が生まれ、子どもに対する申し訳なさから【就労の可能性への見極め】をはかり、【社会で支える仕組みへの切望】を抱く中で《親の力だけではどうにもならない無力感》を突きつけられたように感じ、親の苦しみは増していったように思われる。モナ・ワソー(柳沢訳, 2010)は、「子どもの精神の病に対処している親は、子どもの幸せに対する責任を感じ罪悪感を強め、さらに自尊心の喪失をももたらす」と述べており、親にとっての苦しみの深さが窺える。

このような苦しみに対する看護援助について、先に紹介したB氏が苦しみから解放された体験を例に挙げて考えてみる。B氏は独自のリハビリプログラムを行っていた。そのプログラムの中で、B氏が家事をB家作業所の仕事とし、その工賃として子どもの毎月のお小遣いを、給料と書いた封筒に入れて渡すなどの工夫を取り入れた。すると、子どものできることが増えていったという。B氏は、このことから自分の立てたりハビリプログラムへの手ごたえを感じ、『生活の中でできることを確認してあげたい』という想いが満たされ、B氏の安心感に繋がった。B氏は子どもと新たな関係を構築し、一步一步子どもが自分を取り戻していく姿を確認したことで、自身に対する自信が高まり、自尊心の喪失も緩和したと考えられる。このとき、B氏は苦しみからの解放を感じたのではないだろうか。このように苦しみからの解放を目指す看護援助としては、子どもの就労

に関して、あるいは働きたいという想いに対して、家族はどのような想いでいるのかを真摯に受け止め理解し、その想いに寄り添いながら、家族が現実的にできることを一緒に考え、実施における具体的なサポートを行いながら、家族のできていることを承認し、自尊心の向上を図っていく看護援助が必要だと思われる。

また、研究参加者は皆、張りつめていた気持ちが少しでも和らぐようにとの期待から家族会活動などに参加し、精神の病について理解を深めていた。しかし、家族会の存在が救いになる一方、この病気のことを知れば知るほど子どもの就労への希望は絶望に変わり、家族会に参加して学びを深めるたびに苦悩が膨らむことを感じると、家族会との繋がりも絶ってしまう可能性が考えられる。同じ苦悩に向き合っている仲間との語り合い、繋がり、心身の健康を保つために非常に重要である。継続して家族会に繋がっていくためには、このような心境を共有し合うなどのサポートが必要であるということを、家族が実感できるように援助していく必要があると思われる。

3. 子どもの就労に関する親の気持ちの変化

研究参加者たちの心境は、その後、《できれば働かせてあげたいという親心》へと変化し一般企業での就労を息子に期待していたA氏は、「福祉就労でもできればいいかなあ」と考えるようになった。またB氏は「家の仕事、っていうのもあるものね。これも仕事だよ」と語り、C氏も「10年間継続して働いている職場に、半日ずつ行ってくれたらそれでいいです。急性の症状を呈することなく」と、就労に関しては「できることをしてほしい、せめて、人なみに幸せ、掴めたら」というささやかな希望に変わっていったと語った。

精神障害は中途障害であるため、精神障害者は発病前までは社会の中で学業に励んだり、働くことを獲得したり、障害を感じることなく生活をしてきた。そのため、障害と向き合い折り合いをつける作業は、障害者本人だけでなく家族にとっても悲嘆を

伴う辛い作業であろうと思われる。前述の就労に関するA氏、B氏、C氏の語りは、闘病する息子と向き合う経験から、子ども自身が自分なりのライフ・スタイルを獲得することで納得するという考えに変わっていったことをきっかけに、困難な状況を切り開いていったと考えられる。岩崎、石川、清水他(2003)は障害者本人とともに成長した歴史は、家族が自らと障害者の過去から現在に至る道程に肯定的な意味を付与し、活力に繋がると述べており、前述の闘病する息子と向き合う経験を振り返ったことで、A氏、B氏、C氏は息子とのこれまでに肯定的な意味が付与され、困難な状況が切り開けたと思われる。

しかし、本研究結果局面Ⅲ《できれば働かせてあげたい親心》と局面Ⅳ《親として就労より生活維持を優先して欲しい》は局面間を行ったり来たりしていた。このことは、親が子どもの就労を諦めているように見えても、就労への期待を抱いていると思われる。このアンビバレンスを理解したうえで看護援助が必要であると考えられる。

4. 子どもなりの社会参加

精神障害者の就労の意義について、野中、松為(2003)は、「社会の一員であるという実感を個々人にもたらしてくれるもののひとつが、“就労”である。生活を成り立たせるためのものであり、自分自身の能力を確認するもの、生きがいともなり、生活のリズムをつくり、メリハリとなるものでもある」と述べている。就労を考えることは社会復帰への意欲に繋がり、自分らしく地域で生きていけるような社会参加の実現に繋がるものと考えられ、「就労」のもたらす意義が大きいことが窺える。

また中井(2002)は、就労して自立するという多数派の考えに障害者の生き方を当てはめることが、本来の社会復帰の考え方ではないと示唆している。しかし最初、家族は、子どもの就労に関して、マジョリティであることを求めていた。

これらのことから、《親としての期待》が強い時期は、マジョリティへの想いも強く、これらの考え

方は連動していた。そのため期待が外れた時には、喪失感や悲嘆を生じ、同時に、親としての罪悪感を強め《親の力だけではどうにもならない無力感》を感じる結果になったと考えられる。しかしながら、子どもなりの社会参加を確認できるようになると、張り詰めていた気持ちが和らいでいったように思われる。夏莉(2012)は、精神の病いを得ても、その人の生に何らかの意味を見つけることができるならば、共に暮らす家族にとっては救いともなると述べている。社会参加には障害者の主体性が含まれている(天谷、鈴木、柴田他、2008)ので、親は、子どもなりに社会参加をしている姿を確認できると、子どもの生に何らかの意味を感じられ、張り詰めていた気持ちが和らぐのだと考える。家族が、子どもなりの社会参加をしている姿を確認できるような看護援助が必要であると考えられる。

VI. 結 論

精神障害者の家族が抱く就労への想いとしては、精神障害は中途障害であるため、親は障害を負う前と同じように、《親としての期待》を子どもに抱き、働くことに向き合えない子どもを案ずる中で【愛情と苛立ちのアンビバレンス】が生じ、子どもに対して腹立たしさ・焦りを感じていた。しかし子どもにも働きたいという想いがあり【子どもなりの活動と挫折の繰り返し】を体験していたことを知り、《親の力だけではどうにもならない無力感》を感じ、《できれば働かせてあげたいという親心》を抱きながら、《親として就労より生活維持を優先してほしい》という想いによって変わった。このような就労への期待とそれを阻む問題・諦めざるをえない葛藤状況への想いを十分に受け止めた情緒的な支援の必要性が示唆された。これらの実態を理解したうえでの看護援助としては、①親としての期待が強い時期(局面Ⅰ)には、家族が愛情と苛立ちのアンビバレンスな想いを抱えていることを理解し、その苦しみを受け止めながら、親が子どもの病気を学習できるよう

に支援する、②子どもの病気への理解と共に深まる親としての苦悩を抱えている時期(局面Ⅱ)には、家族自身のアイデンティティの動揺から生じる不安に寄り添い、家族が子どもとの関わりに自信が持てるよう家族のできていることを承認し、自尊心の向上が図れるように援助する、③子どもの就労に関する親の気持ちの変化が見られる時期(局面Ⅲ、Ⅳ)は、親が子どもの就労を諦めているように見えても、就労への期待を抱いていると思われ、このアンビバレンスを理解したうえでの看護援助が必要である、④家族が張り詰めた気持ちを抱えている時期(局面Ⅳを循環)には、子どもなりの社会参加をしている姿を確認できるような看護援助が必要である。

前述①～④の看護援助の必要性が示唆されたが、本研究の限界として、本研究における研究参加者は父親の立場1名、母親の立場6名と立場に大きな差があった。広井(2013)は、人間固有の感情について二つのタイプがあると述べ、一つは母子関係や絆(愛情)であり、もう一つは父子関係や社会性(社会的感情～道徳的感情)として説明している。このことから、立場により働くことに関する感じ方、受け止め方、想いにも違いがあったのではないかと考えられ、これらのことは本研究の限界であると考えている。

今後の課題としては、家族員の立場にも焦点を当てた研究を進める必要があると考える。また、今回の研究の第4局面では、精神障害者と共に暮らし彼らを支えている家族が、就労より生活維持を優先してほしい、との想いを抱いていたことを受け、今後は、精神障害者の就労支援において、就労だけに焦点をあてた支援ではなく、障害者の生活面への支援も含めた就労と生活との調和を目指した支援の必要性も示唆された。

謝 辞

研究を遂行する上で、インタビューに快くご協力頂いたご家族の皆様、参加観察を承諾して下さいました家族会の皆様に心から感謝申し上げます。また、本研究のプロセスにおいて、あたた

かく支え、ご指導くださいました北里大学看護学部教授出口禎子先生に心より御礼申し上げます。

本研究は、文部科学省科学研究費補助金若手研究（研究活動スタート支援、課題番号：21890219）の助成を受けて行った研究の一部である。結果は、第10回国際家族看護学会（2011年6月）にて報告した。

〔受付 13.8.30〕
〔採用 15.3.17〕

文 献

- 天谷真奈美, 鈴木麻揚, 柴田文江, 他: 統合失調症者の社会参加自己効力感を促進する要因, 国立看護大学校研究紀要, 7(1): 1-8, 2008
- 岩崎弥生, 石川かおり, 清水邦子, 他: 精神障害者の家族のケア提供を支える要因—聞き取り調査の定性分析—, 病院・地域精神医学, 45(4): 460-467, 2003
- 近藤信子, 萩典子, 大西信行: 精神病院に長期入院している患者の就労への思いと就労支援, 外来精神医療, 8(2): 123-129, 2008

- 佐藤郁哉: フィールドワークの技法—問いを育てる, 仮説をきたえる—, 新曜社, 東京, 2010
- 鈴木啓子: 精神分裂病患者の抱く希望の内容とその変化の過程, 千葉看護学会誌, 6(2): 9-16, 2000
- 田上美千佳: 精神分裂病患者をもつ家族の心的態度第一報 CFIの検討を通して, 日本精神保健看護学会誌, 6: 1-11, 1997
- 田村信男: 地域精神保健, メンタルヘルスとリハビリテーション, 96-178, 医学書院, 東京, 1993
- 中井久夫: 中井久夫著作集 精神医学の経験5巻 病者と社会, 3-27, 岩崎学術出版社, 東京, 2002
- 中戸川早苗, 出口禎子: 精神障害者の働く動機を支える想いと支援のあり方—地域共同作業所での参加観察を通して—, 日本精神保健看護学会誌, 18: 70-79, 2009
- 夏莉郁子: 心病む母が遺してくれたもの—精神科医の回復への道のり—, 129-132, 日本評論社, 東京, 2012
- 野中猛, 松為信雄: 精神障害者のための就労支援ガイドブック, 9-31, 金剛出版, 東京, 2003
- 広井良典: 創造的福祉社会—「成長」後の社会構想と人間・地域・価値, 147-176, 筑摩書房, 東京, 2013
- モナ・ワソー／柳沢圭子訳, 統合失調症と家族: 156-189, 金剛出版, 東京, 2010

Employment of People with Mental Disabilities and Their Family Members' Feelings on the Employment, and the Ideal Way of Support

Sanae Nakatogawa

Aichi Prefectural College of Nursing & Health

Key words: Employment of people with mental disabilities, Family members' feelings, Nursing support

The working environment for people with mental disabilities in the community is harsh, and many have the experience of failure. Although family members support them when they face difficulties, there are only few researches that dealt with the emotional experience of the family. The purpose of this research is to clarify the emotional experience of the family on "employment for people with mental disabilities" and the process of change in their feelings, and suggests the nursing assistance based on the feeling for "employment" that the family members have.

Participant observation and interviews were conducted at a Family Alliance on Mental Illness. Qualitative analysis of the data yielded nine categories. Furthermore, we categorized their acceptance of the feeling in 4 dimensions that are mentioned in the latter in 《 》. In 《the expectation as parents》, the participants felt irritation and impatience for their child who cannot work because of "the ambivalence of love and irritation". However, their child wants to work and realize that "they repeated trial and failure" and felt 《feeling of helplessness that it cannot be solved just by parents》. They felt 《they want to let their child work if possible》. Then, the feeling changed to; 《as parents they want to prioritize the maintenance of their living rather than getting an employment》. Also, their feelings are going back and forth instead of going in a straight line in the each step of the dimension. This suggests the necessity of the emotional support that considers the feeling of anticipation for employment, problems interfering with the employment, and mental conflict of having to give up the anticipation.